

# 北海道のツツジ群

笠 康三郎(本文50ページ参照)



エゾムラサキツツジ



シロバナエゾムラサキツツジ(シロバナトキワゲンカイ 丸弁,平開,無斑の系統)



ムラサキヤシオツツジ



エゾツツジ(富良野岳。北海道山草会・土田忠男氏提供)



コメツツジ



サカイツツジ(根室・落石。土田忠男氏提供)



エゾヤマツツジ

# 北海道のツツジ群

《口絵④参照》

笠 康三郎 (株)スペースデザイン工業



道外産ながら、北海道では普通にみられる  
クロフネツツジ (北大医学部前の大株)

長い長い冬がやっと終わって雪解けが進み、黒々とした土が街角でも庭先でも顔を見せてきますが、すぐに暖かい春<sup>はじり</sup>がやってくるわけではありません。腐寒い、埃を混じえた烈風がおよそ1カ月も吹き荒れます。そんななかでも、クロッカスやチオノドクサ、フクジュソウなどの可愛い草花<sup>かわい</sup>が黒土のキャンパスに彩りを添えていき、キタコブシとエゾムラサキツツジが木の花のトップバッターとして蕾<sup>つぼみ</sup>をほころばせてきます。

青空をバックにした純白のキタコブシが冬の名残り花だとしたら、暖かいピンクの花房のエゾムラサキツツジは、まちがいなく春をもたらす使者だといえるでしょう。この花を見ると、北国に住む私たちには、ようやく春に手がとどいた実感が湧き上がってきます。

寒さの厳しい北海道では、園芸的に改良が進んだサツキやキリシマ、ヒラドツツジなどを庭に植えて、華やかな、むせかえるような花の群れを存分に楽しむことはできません。その代り、シラカンバやナナカマド、ごつごつした火山性の庭石、そして何よりも、澄み切った空気に合った野趣に富む美しいツツジ類があり、和洋どんな庭にでも必ず一株は植えられています。もちろん、公園や街路の分離帯<sup>まちはか</sup>、街中の小さなフ

ラワースペースに至るまで、ツツジ類の見当たらない所はありません。

以下、こうして北国の生活に深く溶け込み、広く愛されているツツジの仲間を紹介することにします。

## ◆ 道内に自生する ツツジ類

北海道内の山野に生えているツツジ属の植物は9種ありますが、このうちキバナシャクナゲ (*Rhododendron aureum*) と エゾシャクナゲ (=ウラゲハクサンシャクナゲ *R. brachycarpum* var. *roseum*) を除く7種がツツジ類として扱われています。

エゾムラサキツツジとサカイツツジは、植物学上はシャクナゲの仲間とされますが、普通、私たちはツツジの仲間として扱っているので、ここでは含めておきます。

### ☆ エゾムラサキツツジ (*R. dauricum*)

別名トキワゲンカイ。道内では単にムラサキツツジと呼ばれることが多く、早春、真っ先に

花開くこのツツジを植えていない庭はないほどで、北海道を代表する花の一つといえるでしょう。

道内では日高、十勝、北見地方にかけて多く分布し、特に北見にはこのツツジ群落が各所でみられ、なかでも温根湯の大群落は天然記念物に指定されています。

急峻な谷の南向き斜面などに多く、まだ緑が萌えていない黒々とした岩膚にピンクの霞がかかったように咲いています。

半常緑性の灌木で、葉は薄い照葉で緑褐色をしています。秋には紫紅色に紅葉し、各枝の下半分ほどは落葉します。紅紫色の花にはかなり濃淡の幅があり、斑点にも明瞭なもの、淡いものがみられます。

ツツジグンバイムシの被害を受けやすく、こまめに消毒しないと葉に無残な斑紋がついてしまうので注意が必要です。

白花品種はシロバナトキワゲンカイとも呼ばれ清楚で気品のある花を開きます。庭園樹としてはまだあまり出回っていませんが、実生で大量に生産されるようになったので、やがて普及してくるでしょう。葉は黄みを帯び、暑さ寒さ、寒風などへの抵抗性は少し落ちるようです。

なお、高山の厳しい環境に適応した矮性の系統が2種知られ、山草愛好家などの間で愛培されています。ヒメエゾムラサキ (var. nana) は阿寒山系で発見された極矮性の変種で、非常に詰まった樹形をしています。タカネエゾムラサキ (var. alpicola) は、基本種のように枝が立性とならず、細かく枝打ちしながら横開性のこんもりした樹形をつくります。いずれも固定された系統となっています。

#### ☆ サカイツツジ

(R. parvifolium)

東部シベリア、サハリン、朝鮮にかけて分布し、わが国では根室の落石の湿原でのみ発見された希少なツツジで、天然記念物に指定されています。かつて樺太が北緯50度でロシアと分割

されていたとき、その国境付近で発見されたのでこの名がつけられたといわれます。

常緑の小灌木で、枝は地を這い、5月末に紅紫色の花を3~5輪、枝先に開きます。高層湿原のミズゴケ中にツルコケモモ、ガンコウラン、ヒメシヤクナゲなどの小灌木とともに生えており、現地での採取はもちろん禁止されているので、一般にはあまりなじみのないツツジです。

#### ☆ ムラサキヤシオ

(R. albrechtii)

道内の低山から亜高山帯にかけて広く分布し高さ2mくらいにまでなりますが、枝は直立せず、よく分枝しながら横臥ないし斜上する傾向があり、やや開いた樹冠をつくります。

花は5月末から6月にかけて咲きますが、枝先に2~3輪ずつ楚々として咲く様子は、サツキやキリシマでは味わえない気品が感じられ、にごりの入らない艶やかな紅色の花はツツジのなかの逸品であると確信します。

葉は毛を密生してがさがさしており、やや大型で、展葉時から少し赤みがさしています。乾燥のひどい所では葉先から赤く枯れ込むことがあるので、やや半日陰の適湿地に向いています。

#### ☆ エゾヤマツツジ

(R. kaempferi var. latisepalum)

中部以南の低山帯に自生している最もポピュラーなツツジで、アカツツジあるいは単にツツジと呼ばれています。

高さ3mくらいにまでなる灌木で、葉は薄く小型で黄緑色に近く、周囲のわずかの葉を残してほとんど落葉します。

花つきがよく、全株が覆われるほどで、花色は紅ないしオレンジ赤、まれに白花があります。

道南や日高などに多く、各地に特色のある系統が知られます。なかでも渡島半島南端の恵山に産するものをエサンツツジと称し、高値で取引されており、このほか、上ノ国町夷王山に産する系統も、矮性で花色が濃いなどの特徴で



レンゲツツジ



キレンゲツツジ

知られています。

☆ エゾツツジ

(*R. camtschaticum*)

道内の高山帯から千島、カムチャツカ、シベリア、アラスカにかけて分布する矮性の美しいツツジです。形態的には他のツツジ類と随分かけ離れており、花のないときには判別がつきにくいほどですが、深く切れ込んだ紅紫色の花を見ると納得させられます。

地際から<sup>そうせい</sup>叢生し、こんもりとした高さ10~20cmくらいの株をつくります。夏季冷涼な道内では、平地でもそれほど栽培困難ではなく、山草愛好家に広く作られています。

☆ コメツツジ

(*R. tschonoskii*)

南西部に広く自生していますが、道東地域にも自生しているといわれます。

高さ1mほどの落葉性小灌木で、枝打ちは細かく、密な樹冠をつくります。葉は小型、濃緑の紡錘形で、展葉した葉がすっかり固まったころ、ツツジ類のしんがりに咲いてきます。

ほんの1cmにも満たない白い花ですが、花の季節が終わり、すっかり緑一色になった庭の片隅にひっそり咲く姿には心引かれるものがあります。

☆ ヒダカミツバツツジ

(*R. hidakanum*)

道内にはミツバツツジ類は分布しないといわれていましたが、昭和46年、日高地方南端部で見られた珍しいツツジです。自生数も少なく、どのような経緯でこの地に残されたものか、サカイツツジとともに不思議な分布です。

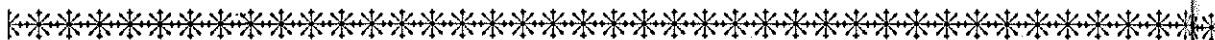
\* \* \*

このほか、レンゲツツジが南西部に自生しているともいわれますが、この地域は古くから日本人が進出していたため、天然分布か人為分布か不明なものが多くあり、いずれとも断定できません。

◆ 道外産ツツジ類で重要なもの

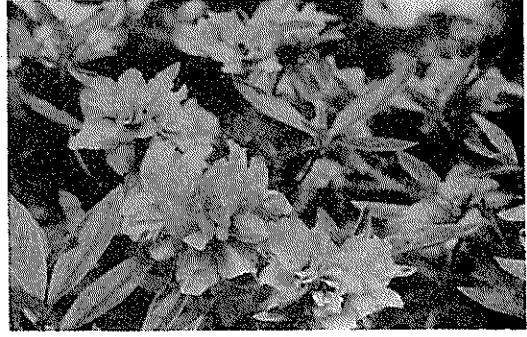
道外産あるいは外国産のツツジ類も、道内で広く栽培されています。道央地方までならサツキ（大盃がほとんど）、キリシマ（日の出霧島と紅霧島が多い）、リュウキュウ（白琉球、若鷺）なども多く植えられ、全道的にみてもレンゲツツジ、ミヤマキリシマ、ヨドガワツツジ、クロフネツツジなどが普通にみられます。

これらのうち、耐寒性、花の美しさ、利用範





シロリュウキュウ



ヨドガワツツジ

圃の広さ、強健さなどから、二つのツツジを北海道にふさわしいツツジとして挙げておきましょう。

#### ☆ クロフネツツジ

(*R. schlippenbachii*)

中国東北地区、朝鮮の原産で、ツツジのなかでは大型に属し、2~3mを超えるものがあります。Royal Azalea の名のごとく、淡紅色の大輪の花は気品があって実に美しいものです。

葉は丸みを帯びた軍配形で、5枚ほどが輪生しているようにつき、やや特異な姿といえるでしょう。

花色が濃く、斑点のはっきりしているものが賞<sup>と</sup>べられますが、現在はほとんど実生で繁殖されているので、なかなか数が少ないようです。ミスト室でオーキシン処理をした枝を挿木すると十分に発根することから、優良系統の栄養繁殖がされると、もっと普及するものと思われま

#### ☆ レンゲツツジ

(*R. japonicum*)

わが国の落葉性ツツジ類の横綱格はなんといってもレンゲツツジで、評価はむしろ海外のほうが高いくらいですが、このツツジの良さが本当に発揮されるのはやはり東北から北海道にかけてでしょう。このツツジの魅力は、なんと

いっても手まりのような豪華な花房で、ちょうど展葉しはじめた浅緑の葉をバックにした姿はボリューム感にあふれています。

レンゲツツジの花色は、紅色から、オレンジ<sup>がばいろ</sup>みが少しずつ強くなった樺色のものまで幅が広く、やはり実生繁殖されているため固定した系統がありません。鮮黄色のキレンゲにも開花後すぐ白っぽくぼけてしまうものがあり、このツツジも挿木による優良系の増殖がまたれます。

なお、レンゲツツジを親の一つにもつエクスパリー・アザレアも随分普及してきており、特異なロウ質の輝きをもった花には好みはありますが、その強健さと花色の豊富さから、利用の機会はますます増えることでしょう。

\* \* \*

道内で利用されているツツジ類は、園芸的に改良され、品種が分化したものはありません。しかし、そのもの持つ美しさを表現する場—北海道のおうらかな自然を持ち込んだ庭—があれば、このうえなにも人手を加えなくてもよいまでに人を引きつけてくれます。

サツキやキリシマを刈り込んだ庭は確かに美しい、しかし、私たちの手元にある野性味あふれたツツジ類をそこに置き換えることはできません。植物材料の質を殺さずに、そのふさわしい場所をこれからも捜しつづければいけないようです。